

自分のもっている知識や技能を活用し、運用する子ども
 —中学1年「自分のことを友だちにつたえよう！～Unit3～」の実践から—

1 単元のねらい

自分自身のことや身の回りのことに関する情報を相手に伝える。

聞き手は、コミュニケーションを図る際の3つのポイント（質問・反応・新情報）を意識しながら、相手の言ったことに反応したり、相手に質問したりする。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

本学級の生徒は、学習に対して前向きで、基礎的な知識を習得するために単語や基本文を練習したり、積極的に友だちとの音読練習をしたりする姿が多く見られる。授業開きの際に行ったアンケート結果から、本学級の約60%の生徒が小学校の外国語活動に対して、肯定的な意見をもっており、意欲をもって取り組んでいたことが分かった。中学校の授業においても、話される英語を理解しようとする姿勢が見られ、分からない表現があってもキーワードを聞き取って予測したり、教師の表情やジェスチャーからこちらの意図をくみ取ろうとしたりする生徒が多く見られる。さらに、英語を話すことにも抵抗を感じる生徒が少なく、インタビューゲームなども積極的に取り組んでいる。

次に挙げるのは、年度初めに行ったアンケートの「英語を使ってどんなことをしてみたいか」という項目について、肯定的な回答をした生徒の割合である。（複数回答あり）

- | | |
|--------------------------------|-----|
| (ア) 英語を使って外国の方とコミュニケーションを図りたい。 | 68% |
| (イ) 海外旅行で英語を使いたい。 | 62% |
| (ウ) クラスメイトと英語で話がしたい。 | 51% |
| (エ) 字幕なしで映画を見たい。 | 28% |
| (オ) 英語の歌を聴いたり、歌ったりしたい。 | 28% |

生徒は、(エ)(オ)のような英語を理解したいという欲求よりは、(ア)～(ウ)のような相手を意識したコミュニケーションに対する欲求が高いことが伺える。このような生徒の実態を踏まえた上で、学んだことを自らいかす子どもの姿を実現すべく、学習した言語材料をどこでどのように活用すべきかを考えさせ、コミュニケーションに触れさせる必要があると考え、本単元の授業を構想した。

(2) 本単元の内容と各教科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

Unit3は、新任のブラウン先生の紹介から始まり、生徒が先生に聞きたいことを質問をする単元で、一般動詞やそれらの疑問文、否定文を学習する。

今までは、イコールの役割をするam, is, areを使って自分のことを伝えたり、相手に尋ねたりすることを学んできた。このUnitでは新しくplay, like, come, walk, have, want, speakといった一般動詞を含んだ文や疑問文とその応答文、否定文を学習し、さらに自分のことを伝えたり、相手のことを尋ねたりする力を養うことをねらいとしている。

Unit1 Part3（一郎が転校生のベッキーに出身地を聞く場面）を学習した際に「なぜ、一郎は“Where are you from?”ではなく、“Are you from Canada?”と尋ねたのか。」という発問に対して、「転入生がカナダから来ると聞いていたので、確認のために尋ねた。」「一郎はカ

ナダに住んでいたもので、カナダ訛りの英語に気付いたから、もしかしてと思い尋ねた。」といった意見が出た。教師が一つの疑問を投げかけることで、Are you ~?のような「はい、いいえ」で答えることができる質問は何かしらヒントになるものがある場合に使われるという結論を生徒たち自身が導き出した。少しずつではあるが、生徒たちは、どんな場面でその表現が使われるのかを考えるようになってきている。よって、本単元でも、言語材料の使用場面を意識させ、どのようにしたら普段行っているような会話が英語でもできるのかを思考させ、判断したことを表現するような活動（チャット）を設定する。この活動では、生徒が自ら興味関心のある話題について自分のことを伝えたり、相手のことを尋ねたりする。既習表現や新出表現を用いることで、その表現の定着をねらい、友達とやりとりをして、思考力・判断力・表現力を習得させたい。このような学び合いを通して、本校英語科が願う「適切な表現を選択して、自分のもっている知識・技能を活用し、運用する力をもつ生徒」に近づけるのではないかと考える。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

このような本単元のもつ性質と本学級の実態を踏まえた上で、単元を以下のように展開する。本単元の最終には、チャット活動を行う。そのために、第1次からどのようにしたら会話（チャット）が続くのかについて考えさせ、コミュニケーションを図る際の3つのポイント（質問・反応・新情報）を共有させたい。あわせて、I play tennis.のような基本的な文から、回数を重ねるごとにI play tennis every Sunday.のようにオリジナル情報（いつ、どのように）を付け加えられるように、話す相手を変えて、繰り返しチャットを行わせたい。また、Unit1で作った自己紹介文をもとに、今興味をもっていることについて自己紹介文を書かせ、まとまりのある文章を書くことにもチャレンジさせていく。まとまりのある文章を書かせるために、マッピングを取り入れ、自分の考えを整理する助けにさせる。自己紹介文を書くことに戸惑っている生徒には、モデル文や友だちの文を参考にして何を書けばよいのか考えさせたり、色分けした英語の語順カードを教師が示したりするなど、自分で文が作ることができるように支援する。

このように自分のことを伝え、友達と会話を進めて課題を解決する活動を充実させ、場面や状況に応じて、自分が伝えたいことを適切に表現するために自分自身で判断して表現する場面を設定する。このような言語活動の充実が、基礎的・基本的な知識や技能の定着を図り、思考力・判断力・表現力を高め、学んだことをいかす子どもの育成につながるのではないかと考えている。

3 展開計画（全9時間）

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇は、学び合い）
1	自己紹介をしよう。 ～自分の普段していることや好きなこと編～	1. 2 3. 4 5 6 7	<ul style="list-style-type: none"> ・一般動詞を含む文の意味や構造および、その運用について理解する。（肯定文、否定文、疑問文） ・会話が継続するための3つのポイント（質問・反応・新情報）を考える。 ・自分が今、はまっているものについてマッピングを書き、スピーチを作る。 ◇今後のチャット活動で使えるように、2つの会話を比べて、どうすれば会話が続くのかを個人で考えた後、班で話し合う。
2	自分のことを伝え、友だちのことを聞く。	8 9	<ul style="list-style-type: none"> ・放課後、何をしているのかについてチャットをする。 ・教科書に文を付け加え、チャットに変えることで、コミュニケーションを図る際の3つのポイントをどのように使うのかを共有する。 ・今興味をもっていることについてチャットをする。

			◇学んだ表現やコミュニケーションを図る際の3つのポイントを活用するために友だちとチャットをする。
--	--	--	--

4 授業の実際

(1) 自分の考えをもち、人の考えと比べながら、自己の伸長を図る探求的な学び合い ～どうすれば会話が続けるのか～

生徒は、中学校の3年間で学んだことを使って自分の気持ちや意見を述べる活動を繰り返すを行い、言語の運用能力やコミュニケーション能力を育てていく。その第一歩がこの単元であり、第1次では会話を継続させるためには何が必要かを考えさせた。生徒に2パターンの会話を示し、どのようにしたら会話が続けるのかについて考える学習を行った。資料1は生徒に示した2パターンの会話例である。

資料1 生徒に示した会話①②（新情報・反応・質問は後で提示した）

会話①	会話②
A：先週の日曜日、新発売のゲーム買ったよ。（新情報）	A：先週の日曜、新発売のゲーム買ったよ。（新情報）
B：本当に？！すごいね！（反応）	B：本当に？！（反応）
A：うん。新しいから画像がきれいだよ。（新情報）	やってみてどうだった？（質問）
B：へえ、そうなんだ。（反応）	A：新しいから画像がきれいだよ。（新情報）
A：良かったら、明日うちで一緒にしない？（質問）	B：やっぱり、そうなんだ。（反応）
B：行く！（反応）	CMで見て、欲しかったんだ。（新情報）
	A：そうなんだ。（反応）
	良かったら、明日うちで一緒にしない？（質問）
	B：行く！行く！！（反応）
	楽しみだなあ。（新情報）

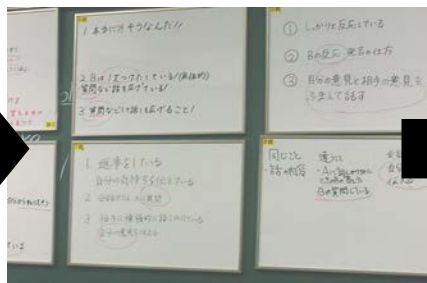
生徒たちには、3つの視点（共通点・相違点・会話が継続するポイント）を与え、個人で考えさせた後に班での話し合いを行わせた。多くの生徒が、会話②の方が会話が継続していることに気付いてはいたが、どうすれば会話が継続するのかを具体的な言葉で表現するのに難しさを感じている生徒もいた。また数人の生徒は、会話①でも十分会話が継続しているのではないかと疑問に思っていた。このように、個人でじっくりと考える時間を設け、一人ひとりが課題と向き合い、何をどのように考えるのかを整理させなければならない。正しい答えを一つ導き出すことも大切ではあるが、その答えに辿り着くための過程も大切にしたい。また、一つの答えではなく、あらゆる視点から物事を考える態度も育てていきたい。そのためには、教師自らが生徒の思考の過程を大切に、認めなければならない。

班活動が円滑に行われる条件の一つに班員がしっかりと自分の意見を述べることである。班活動の前に、一人でじっくりと考える時間を設けたことで、班での話し合いが活発になった。一人で試行錯誤しながら課題について自分なりの考えを確かなものにする過程があったからこそ、友だちの考えを聞いたときに共感したり、納得したりした生徒が多くいた。班活動を終え、クラス全体で「コミュニケーションを図る際の3つのポイント」を確認した。生徒にとって、普段の会話がどのように行われているのかを客観的に考える良いきっかけとなった。



〈個人で考えた後の班活動〉

自分の考えをもち、人の考えと比べながら、自己の伸長を図る学び合い



〈クラス全体での共有〉

コミュニケーションを図る際の3つのポイント

質問・反応・新情報



〈いかしている姿〉

コミュニケーションの手段として、実際に使っている

次に、30秒間で友だちと会話をする活動を行った。実際の使用場面になり目の前に話す相手がいると、理想通りにはいかず何をどのように話せばいいのか、相手が何を尋ねているのかなど迷いや戸惑いを感じたようであった。資料2は、生徒のふりかえりである。

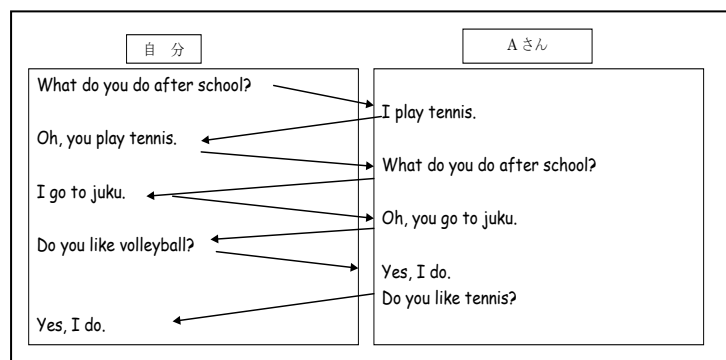
資料2 30秒チャット後のふりかえり

- ・簡単だと思っていたのに、実際に会話をすると難しかった。(生徒A)
- ・相手に尋ねたいのに、相手に質問されて自分だけが新情報を伝えていた。次にする時には、相手のことも尋ねたい。(生徒B)
- ・単純に“What do you do after school?”からお互いの新情報だけを伝えて、2人とも反応やそれからの質問ができなかった。相手が何を言うのかをよく聞いたり、自分のことを伝えたりしなければいけなくて、たった30秒でもすごく忙しく感じた。(生徒C)

生徒のふりかえりからは、難しかったという感想で終わることなく、次はこうなりたい、こんなことにチャレンジしたいという意欲の高まりを感じるものが多くあった。それは、活動中の生徒の表情からも伺えた。生徒は、英語で友だちと話せることに喜びを感じており、決まった例文を言い合う練習とは一味違い、相手が何を言うのかわからない緊張した状態で、今まで日本語でも話さなかった情報を知ることができる喜びと、お互いに知らない情報を英語を使って共有できることに達成感を味わっているように伺えた。

(2) 学習した表現の定着をねらう学び合い
～What do you like?～

(1)で学習したコミュニケーションを図る際の3つのポイントを意識し、一般動詞を含んだ文を使って会話する目的のもと、次のような学習を行った。資料3の友だちのチャットをクラスで共有し、まず(1)で行ったチャット“What do you do after school?”について1分間会話を続ける課題を与えた。このチャットで使えそうな表現もあわせて学習し、自分で文を選択して使っていくことから始めた。話す相手を変えて、チャットを2回行った後、資料3にあるように友だちのチャットを示し良い点と改善点を見つける学習をし、もう一度「コミュニケーションを図る際の3つのポイント」を確認し、どのような流れで会話をする



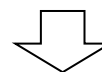
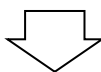
資料3 友だちのチャットから学ぶ

のことも伝え、相手のことも聞くことができるのかを共通理解した。この時、子どもたちは友だちの例から良い点と改善点を探すことで、自分のチャットと比べ自分のものをより良いものにするため修正を加えた。このように理論と実際を適度なバランスで組み込むことで、頭で理解したことを実際の行動につなげたり、実際に行った会話を理論をもとに修正を加えたりすることができ、それらの行為を繰り返しながら、学んだことを自分のこととして取り入れ、またその取り入れられたものをチャットにおいて発信していく。この過程が、子ども一人一人の思考力・判断力・表現力を育むと考えられる。資料4と5は、子どもが実際に行った会話とそのふりかえりである。

資料4 生徒Dと生徒Eの会話

資料5 生徒Fと生徒Gの会話

<p>生徒D: What do you like? 生徒E: I like playing volleyball. 生徒D: Do you practice volleyball every day? 生徒E: Yes, I do. How about you? 生徒D: I like playing tennis. Do you like tennis? 生徒E: Yes, I do. I like reading <i>Tennis no Oujisama</i>.</p>	<p>生徒F: What do you like? 生徒G: I like books. My favorite book is Potty. It's horror. The writer is Yamada Yusuke. He's popular. What do you like? 生徒F: I like books, too. I read books every day. My favorite book is Monhan. It's action. It's fun. I want many books.</p>
---	---



<p style="text-align: center;">チャット後のふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前は、僕の好きなテニスと相手の好きなバレーが出てきたけど、今回はテニスのことを中心に話を進めることができました。相手がテニスの漫画を読むのが好きだと知ることができて良かったです。(生徒D) ・相手がたくさん質問してくれたので、私は新情報しか言えませんでした。それに、相手の新情報が分かって、反応しかできませんでした。もっと、相手のことも知りたかったので、もっと質問したいなと思いました。(生徒E) 	<p style="text-align: center;">チャット後のふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手がずら〜と話した時の反応するタイミングが全然分からなくて、今回は難しかったです。そういう時の反応の仕方が分かると良いです。これからどんどんやって上手になると良いです。(生徒F) ・何を言おうか迷っていたので、自己紹介で書いたことを全て一気に言ってしまいました。相手の人は困っていました。私も相手の人が話すときに反応ができずに困りました。次は、もっと相手のことを考えてチャットができるといいなと思いました。(生徒G)
---	--

資料2から導入時に行ったチャットでは、質問できた、できなかったといった自分の行為に関するふりかえりが多いのに対し、資料4と5では最後のチャットで相手のことを知ることができて良かった、相手のことを知りたいからもっと質問したい、相手のことを考えてチャットがしたいなどの相手を意識した内容の記述が随所に見られる。これは、本部会の願う豊かな学びの姿である。友だちとのかかわり合いを大切に、互いの考えや気持ちを伝え、それを尊重しあう姿だと考える。相手に伝わりやすい表現を用いようとしたり、相手の言っていることを理解しようとしたりと相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとする中で、そのために

は自分は何をどのように伝えたらよいのだろう、相手の言っていることに対してどのように反応したらよいのだろうという思考力・判断力・表現力の根底となる視点が芽生えている。資料6は単元の学習活動と評価基準である。また、実際の割合は本単元の終わりの評価である。

資料6 「思考力・判断力・表現力」の学習活動と評価基準

学習活動	評価基準		
	A	B	C
学んだ表現やコミュニケーションを図る際の3つのポイントを活用するために友だちとチャットをする。	自分のことを具体的(いつ, どのように)に伝えたり, 聞かれたことに答えたりした後, 新情報を加えたりしている。	自分のことを伝えたり, 聞かれたりしたことに對して答えている。	聞かれたことのみ答えている。
実際の割合 (%)	57%	43%	0%

5 成果と課題

自分が話したい内容を話したい相手に伝える活動を繰り返すことで、身の回りの出来事や自分の興味に関する内容を英語で表現することができるようになってきている。自分が伝えたい内容を英語で考え、英語で伝え、相手の質問に答える活動を継続的に行うことで、即興での「話す力」や「相手が尋ねていることを聞いて、それについて答える力、新しい情報を話す力」を徐々に育成することが大切である。今回、生徒同士での学び合いを通して互いに高め合う場面を積極的に取り入れた。話した内容や会話が継続する3つのポイントが盛り込まれているかを客観的に見られるようにチャットを復元する(書く)活動を取り入れ、生徒同士でよりよいチャットとはどういうものかを自分たちの力で気付き、表現力を高め合う生徒同士の高め合いを意識したことで、他者の良いところや自分の課題に気付かせ、相手によりわかりやすく伝える表現の仕方を自分なりに考えさせ、実践することができた。

課題として、2つのことが考えられる。まず1つ目は、スピーチとチャットを混同している生徒がいたことである。最後のチャット例でも挙げたが、自己紹介文を書かせた後にチャットを行ったため、必要な情報のみを伝えることができず、スピーチのように一方がたくさんの情報を伝え、それが終わると、もう一方が情報を伝えるといった形になったペアもいた。しかし、生徒の感想にもあったように、生徒自身も相手が困っているのに気付いており、相手の立場を理解しているようである。ただ、どうすればいいのか自分達では改善策が見つからなかったため、今後さらにチャットを練習したり、スピーチの仕方を学ぶことで、改善されていくものであると考える。2つ目は、評価方法についてである。今回の目標に沿って、書かれたものを評価する方法を選んだが、生徒が話しているところを評価するとなると、瞬間的に全員を行うことは困難である。考えられる方法としては、別の時間にパフォーマンステストを行ったり、1時間に数ペアを評価し、それを数時間繰り返したり、録音したりなど外国語の表現能力を評価する方法は様々であるが、思考力・判断力・表現力を評価する方法はさらに研究していかなければならない。

(文責 須田香織)